

生徒のコミュニケーション能力を高めるための自立活動の取組

ーソーシャルスキルトレーニングにおける問答ゲームの効果検証を通してー

特別支援教育室 長期研修生 教諭 宮内 侑

【要 約】

他者と円滑にコミュニケーションを行うには、聞く力や伝える力などの言語技術を高めることが効果的だと考え、生徒と教師による個別の問答ゲームに継続して取り組んだ。その結果、言語技術が高まり、その言語技術をソーシャルスキルトレーニングで活用することで、生徒は他者との関わりに自信が持てるようになった。問答ゲームを通して言語技術を高め、更にソーシャルスキルトレーニングを行うことが、生徒のコミュニケーション能力を高めることに有効であった。

【キーワード】 言語技術 自立活動 問答ゲーム ソーシャルスキルトレーニング
コミュニケーション能力

1 研究の目的

中学校特別支援学級担任として生徒と関わる中で、社会参加に向けて他者との関わりや協力が必要不可欠であると感じていた。しかし、生徒は特定の相手とのコミュニケーションを望む傾向にあり、会話の内容も、自分の好きなことや得意なことに偏りがちであった。進路指導の際の面接練習では、初対面の相手に緊張し、自分の考えや気持ちを簡潔に伝えられないことが多かった。また、学校生活で、困った際に誰かに気付いてもらうまで待っている生徒や、助けてもらった際に感謝の気持ちを述べない生徒もいた。関係性が築けている相手であれば親密に関わることもあるが、誰に対しても同じように関わることは難しかった。このような状況から、生徒が社会参加に向けて、他者と円滑な関わりを持てるようになることが課題だと感じていた。

生徒が、意欲的に他者と関わろうとするためには、十分な知識や情報に加え、発達段階に応じて他者と関わる経験を積み上げていく必要があるとあり、相手の話を正しく理解し、自分の考えを適切に伝える技能を身に付けることで、他者とのコミュニケーションが円滑に行われると考える。しかし、これまでの実践を振り返ると、生徒が、相手の気持ちを考えて行動する場の設定や、相手の話を聞き、理解し、それに対して自分の考えを適切に伝える機会の確保が十分ではなかった。

そこで、本研究では、生徒が自分の考えや思いを表現する方法を工夫しながら、自ら他者と関わろうとする態度を育成するために、自立活動の指導の中で言語技術を高める活動を計画し、実践することとした。そして、その活動で高めた言語技術が、他者との関わりにおいて生かされ、コミュニケーション能力を高めることに効果的であるかどうかを検証することとした。

2 研究の内容

(1) 文献等による研究

コミュニケーション教育推進会議（2011）において、コミュニケーション能力は「いろいろな価値観や背景をもつ人々による集団において、相互関係を深め、共感しながら、人間関係やチームワークを形成し、正解のない課題や経験したことのない問題について、対話をして情報を共有し、自ら深く考え、相互に考えを伝え、深め合いつつ、合意形成・課題解決する能力」と定義されている。また、特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編では、「コミュニケーションとは、人間が意思や感情などを相互に伝え合うこと」と示されている。これらを踏まえて、本研究では、コミュニケーション能力を「対話において、相手の話を聞き、理解するとともに、自分の考えや気持ちを伝え合う力」とした。そこで、自立活動の指導の一つとして、他者とのコミュニケーションに必要な言語技術を高めるために、問答ゲームを行うとともに、問答ゲームを通して高まった言語技術を活用したソーシャルスキルトレーニング（SST）を行うこととした。

ア 「問答ゲーム」

三森（2006）は、言語技術教育には言語の4機能（話す・聞く・読む・書く）と思考の方法の訓練があり、その目的と特徴から、最初の取組に対話の訓練を挙げている。対話の訓練として、自身が提唱する「問答ゲーム」があり、その中で、対話の型を身に付けるとともに、質問する力と、質問に対応する力が身に付くと述べられている。「問答ゲーム」とは、「ルールを守り、自分の意見を述べる訓練の繰り返しを通して、結論先行の対話の型を身に付けるとともに、相手の質問に対して対話を継続していくもの」である（表1）。これにより、質問に対して自分の意見を述べる力だけでなく、質問する力も向上すると述べられている。

表1 「問答ゲーム」の基本ルール

- | |
|-------------|
| ① 結論を最初に言う |
| ② 主語を入れる |
| ③ 理由を言う |
| ④ 結論の再提示をする |

イ 言語

文化審議会答申（2004）では、言語について、「知的活動、感性・情緒、コミュニケーション能力の基盤として、生涯を通じて個人の自己形成に関わるとともに、文化の継承や創造に大きく寄与するもの」と示されている。すなわち、言語とは、他者とコミュニケーションを行うための根幹をなすものであると考える。

(7) 言語能力

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会（2016）において、言語能力とは、「筋道を立てて物事を考える論理的思考の前提となるもので、話し言葉や書き言葉以外の言語や非言語をも含めた広範な能力として捉えられる場合もある」と述べられている。また、「言葉に関わる知識・技能や態度等を基盤に、「創造的・論理的思考」「感性・情緒」「他者とのコミュニケーション」の三つの側面の力を働かせて、テキスト（情報）を理解したり文章や発話により表現したりする能力」とも述べられている。そこで、本研究では、言語能力のうち「他者との対話やコミュニケーションにおける会話を展開する能力」に着目し、中でも、「他者とのコミュニケーション」の側面において言葉を通じて伝え合う力に重点を置いた。この力を高めることで、自ら人や社会と関わり、自己を表現し、他者の気持ちに共感するなど、互いの存在についての理解を深め、尊重しようとする態度につなげたいと考える。

(4) 言語活動

平成20年告示の小・中学校学習指導要領では、言語活動について「言葉による記録、要約、説明、論述、討論のほか、歌、絵、身体による表現など、言語及び非言語による学習活動を「言語活動」として重視し、その充実を図る」と示されている。また、言語活動の充実に関する指導事例集中学校版（2011）では、「子どもたちの思考力・判断力・表現力等を育むために、記録、要約、説明、論述などの言語活動を発達の段階に応じて行うことが重要」と示されている。これらを踏まえ、本研究における言語活動は、聞くことと話すことに焦点を当てて取り組むこととした。

(7) 言語技術

三森は、「言語技術とは、文字から語彙、綴り方、文法や聞き方、話し方、読み方、書き方、考え方までを含めた、言葉を操るための全ての技術の総称で、英語の Language Arts を訳語したものである」と述べている。本研究では特に、聞き方や話し方、考え方に焦点を当て、問答ゲームの実践を通して言語技術を高めることを目的とした。

ウ 対話の型

問答ゲームを進めるに当たっては、前述のルールを守って実施することとし、本研究における対話の型を設定した（表2）。生徒は、教師の質問に対して、最初に自分の考え（結論）を述べ、その後に理由を述べる。教師は、生徒の返答から出た言葉に対して、内容の深まりや広がりにつながる質問を返し、更に生徒が、自分の発言した内容を意識しながら返答する。生徒の実態に応じて問答を繰り返し

表2 対話の型

- | |
|----------------|
| ① 教師が質問をする |
| ② 生徒は結論と理由を言う |
| ③ 教師が質問を返す |
| ④ 生徒は質問に返答をする |
| ⑤ 質問と返答を繰り返す |
| ⑥ 教師が結論の再提示を促す |

ていく中で、教師は結論の再提示を生徒に促す。結論の再提示とは、それまでの質問に対する理由や自分の考えをまとめながら、改めて結論を述べることであり、自分自身の結論を持つという意識が身に付くとともに、対話が成立しやすくなる。

(2) 生徒の実態

研究協力校の特別支援学級の生徒（4学級13名）の多くは、自分の好きなことや得意なことについて意欲的に話す一方で、関心のない話題には加わりとせず、相手からの質問に対して適切に返答をすることが難しい場面がよく見られた。また、教師や学校生活支援員からの話し掛けに対して、曖昧な返答やうなずきだけの反応も多く、話し掛けた相手が生徒の考えを代弁したり推察したりするなどして会話が成立している場面もあった。このような状況から、生徒は相手から話し掛けてもらうことや、自分の考えや意図をくみ取ってもらうことに慣れてしまい、自分から他者と関わりを持つようしたり、自分の考えや気持ちを伝えたりしようという意識が低いことが分かった。研究対象とした、自閉症・情緒障がい特別支援学級に在籍する4名の生徒においてもこうした傾向があり、思うようにいかない際には、ふさぎ込んだり、感情が乱れて何も手につかなくなったりする様子が見られた。

(3) 問答ゲームの実践

ア 個別の問答ゲーム

6月から10月にかけて8回、個別に問答ゲームを実施した（図1）。質問方法や内容は、生徒の実態に応じて設定し、対話の型を意識して行った（図2）。実践開始当初は慣れない対話の型に戸惑いながらも、一つの内容について好きか嫌いかを問い、結論と理由だけを述べるやり取りを数回繰り返すことで、全員が対話の型を意識して自分の意見を述べるようになった。問答ゲームの回数を重ね、言語技術が高まってくると、質問と返答の回数が増えるとともに、最初の質問から結論と理由を述べる生徒もいた。結論の再提示の場面では、実践前半は自分が述べた内容を忘れていたり、筋道立った説明にならなかつたりしていたが、問答ゲームに慣れてきた実践後半では、対話をする中で内容を整理して再提示するようになった生徒もいた。

問答ゲームを継続して行う中で、生徒は、教師の質問に対して自分の考えを述べるだけでなく、教師に質問をすることもあり、教師は、その質問に答えながら生徒とのやり取りを進めていった。その際、生徒自ら関わりを持つようとして質問したことや、対話を発展させたことを褒めることで、生徒の他者と関わりを持つよう、自分の考えや気持ちを伝えようという意欲の向上につなげていった。



図1 問答ゲームの様子

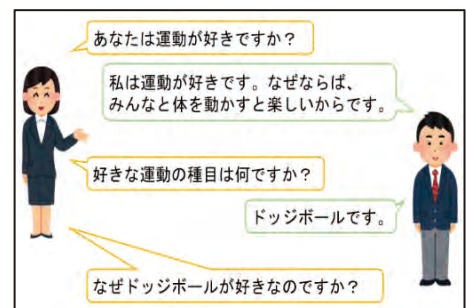


図2 問答ゲームの進め方

イ ICTを活用した問答ゲーム

対話の型への意識を継続することを目的として、夏季休業中に、ロイロノートを活用し、1週間に1回程度の頻度で計6回のオンラインによる問答ゲームを行った（図3）。ただし、実施については任意とした。質問が記載されたカードを生徒に配信し、生徒は、質問に対して自分の考えや理由を打ち込んで返答をすることとした。教師は、返答のあったカードの内容に対して、感想を返したり、生徒の実態に応じて再度質問をしたりした。

ロイロノートを活用した問答ゲームを行ったことで、夏季休業中も対話の型への意識を継続することにつながり、2学期の問答ゲーム再開時にスムーズに臨めた生徒もいた。また、対面での問答ゲームと比べて、視覚的

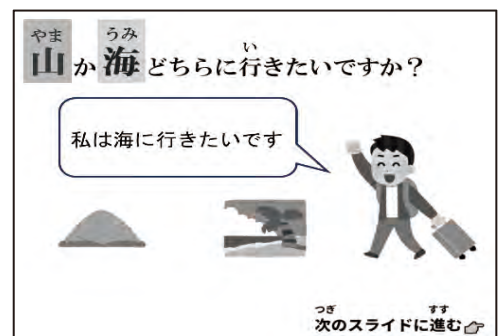


図3 ロイロノートを活用した問答ゲーム

に情報を得られるため、内容が確認しやすく、落ち着いて考えられたという意見があった。

(4) ソーシャルスキルトレーニングの実践

ソーシャルスキルトレーニングとは、教師が、人間関係についての基本的な知識や対人関係の問題の解決方法、自分の意思を状況や雰囲気に合わせて相手に伝えることなどについて説明を行い、生徒は、模範演技で見本を見たり、ロールプレイを通じて練習を行ったりすることである（図4）。

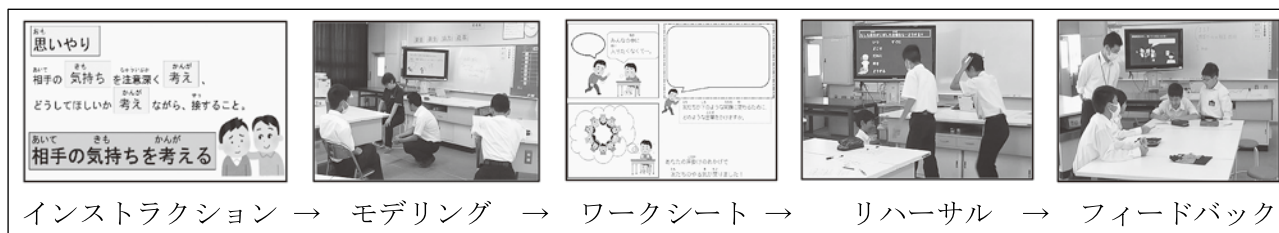


図4 ソーシャルスキルトレーニングの流れ

本研究のソーシャルスキルトレーニングでは、問答ゲームで高まった言語技術を活用し、コミュニケーション能力の向上につなげることを目的として、9月から10月まで、対面で8回実施した。実践に当たっては、生徒に活動の目的や設定した場面を伝え（インストラクション）、どのような言動をとるのが望ましいか、教師による見本を見せた（モデリング）。その後、生徒は、ワークシートに自分の考えを書き、生徒同士によるリハーサルを行い、互いの言動について振り返った（フィードバック）。取り扱う内容については、対人関係などのトラブルの未然防止や、よりよい人間関係の構築につながるように、学校生活における具体的な場面を設定した（表3）。

表3 ソーシャルスキルトレーニングの実践

回数	ロールプレイの場面設定	形態
第1回	落ち込んだ級友に対して	小集団
第2回	体育大会練習に参加したくない友人	ペア
第3回	体育大会練習に参加したくない友人	小集団
第4回	リレーで転んだ友人	小集団
第5回	給食準備でカレーをこぼした友人	ペア
第6回	給食の食缶を返し忘れた友人	小集団
第7回	休み時間の会話から	小集団
第8回	友人との会話（アイメッセージ）	小集団

ア 小集団でのソーシャルスキルトレーニング

よりよい人間関係の構築を目指して、生徒が会話を継続したり、相手を思いやった言動を考えたりするために、休み時間や給食の準備、片付けなどの場面を設定して、ロールプレイを行った。給食の片付けの場面では、食缶の返し忘れは、当番の仕事として責任を持って再度返却に行くべきだと考えていた生徒が、ほかの生徒の意見を聞き、自分とは違う考えがあることに気付いた様子であった。また、休み時間の会話の場面では、会話が続くような返答の仕方について考え、自分の意思を相手に伝える「アイメッセージ」の使い方の良さに気付く生徒もいた。

イ ペアでのソーシャルスキルトレーニング

体育大会を控えていたため、練習への参加に積極的な生徒のペアと消極的な生徒のペアに分け、練習への参加に消極的な生徒に関わる場面を設定して実施した。積極的なペアは、体育大会に消極的な生徒がいることに気付くきっかけとなり、相手に寄り添った言葉を掛けようとする様子が見られた。消極的なペアは、練習への参加を促す役をすることで、相手を誘ったり声を掛けたりすることの難しさなどを知り、日頃、声を掛けてくれる級友たちの優しさに気付き、次回声を掛けられた際には気持ちを切り替えようというきっかけになった。

ウ ソーシャルスキルトレーニングと問答ゲームの関係

問答ゲームを通して言語技術が高まってきたことで、ロールプレイの際、自分の考えや意見を簡潔に伝えられるようになった。また、漠然と話すのではなく、「なぜならば」と理由を添え、相手に分かりやすく伝える生徒が増えた。フィードバックの場面では、教師の「どうしてそのような言動をしたのか。」という質問に対して、対話の型を使って説明をする生徒もいるなど、伝え合う力の高まりが感じられ、他者とのコミュニケーションが円滑に行われるようになってきた。

(5) アンケート及び聞き取りの実施

ア アンケート及び聞き取りの方法

対象生徒と学級担任等に対して、コミュニケーションに関するアンケートを実践開始前（6月）と実践最終日（10月）に実施した（図5）。アンケートは事前・事後ともに同じ内容で行い、事後アンケートの際には個別に生徒からの聞き取りを行った（表4）。

表4 事前・事後アンケート及び聞き取りの内容

No	内容	できる	できない	対象	アンケート内容		聞き取り(11)
					アンケート内容	コミュニケーションの実態(15)	
1	だれかに助けてもらったときに、「ありがとう」と言える。			対象	他者との関わりの基礎(3) 他者の意図や感情の理解(3) 自己理解と行動の調整(3) 集団参加の基礎(3) 自己理解(3)	問答ゲームで意識したこと(4) SSTで意識したこと(2) 他者との関わりにおいて変化してきたこと(3) 実践を通して良かったこと(2)	
2	したくないことがあった場合、「イヤだ」「したくない」ではなく、「できません」など、ていねいにこたえられることができる。						
3	先生や友だちの話を最後まで、静かに聞くことができる。						
13	自己紹介で自分の名前や得意なこと、好きなことを言うことができる。						
14	自己紹介で、長所(よいところ)と短所(苦手なところ)を、説明できる。						
15	他の人の長所(よいところ)を具体的に褒めることができる。			生徒	実施	事後に個別に実施	
				担任等	実施	適宜実施	

図5 アンケート(一部抜粋)

()内の数字は、質問数

イ アンケートの結果

(7) 自己評価

生徒の自己評価は事前・事後とも、全体的に高く、生徒は、級友や教師と円滑に関われていると考えていることが分かった（表5）。

表5 事前・事後アンケートの結果

		他者との関わりの基礎(3)	他者の意図や感情の理解(3)	自己の理解と行動の調整(3)	集団参加の基礎(3)	自己理解(3)	合計(15)
生徒A (中3男)	自己	3→3	1→2 ○	3→3	3→3	3→3	13→14 ○
	他者	2→3 ○	2→2	1→2 ○	1→3 ○	3→3	9→13 ○
生徒B (中2男)	自己	3→2 ▲	2→2	1→1	2→2	3→3	11→10 ▲
	他者	1→2 ○	2→2	1→2 ○	1→1	3→3	8→10 ○
生徒C (中1男)	自己	1→2 ○	1→2 ○	2→2	1→2 ○	3→3	8→11 ○
	他者	1→1	2→2	2→2	1→1	2→3 ○	8→9 ○
生徒D (中1男)	自己	3→3	3→2 ▲	3→1 ▲	3→3	3→2 ▲	15→11 ▲
	他者	2→3 ○	3→3	1→2 ○	3→3	3→3	12→14 ○

()内の数字は質問数、○は評価が上昇した項目、▲は評価が下降した項目

しかし、事前アンケートにおける他者の意図や感情の理解の項目については、ほかの項目と比べて評価が低く、友人とのトラブルの原因に、この項目が関係していると考えられた。そこで、ソーシャルスキルトレーニングでは、その部分に焦点を当て、改善する場面を設定して行った。その結果、日常生活の言動に良い変化が少しずつ見られるようになり、一定の効果があつたと考えられる。

(4) 他者評価

学級担任による他者評価について、事前アンケートでは、生徒の自己評価と比べると多くの項目で低い評価となっていた。このことから、生徒は級友や教師とコミュニケーションを取る際に困難さを感じていなかったり、うまく付き合えていると思ったりしていたが、周囲の人間は必ずしもそのように感じていたわけではないことが分かった。しかし、事後アンケートでは、事前アンケートと比べて多くの項目で評価が上昇しており、問答ゲームやソーシャルスキルトレーニングを継続して行うことは、他者との関わりや自己の行動の調整について一定の効果があることが分かった。

ウ 生徒及び学級担任からの聞き取りの結果

実践期間中に行った学級担任等からの聞き取りを基に、問答ゲームやソーシャルスキルトレーニングの実践を通して見られた生徒の変容をまとめた(表6)。このことから、問答ゲームやソーシャルスキルトレーニングを継続して行うことは、対話の型の定着や、他者との関わりにおいて効果的であることが改めて分かった。特に、生徒は実践したことに対する有用性を感じており、日常の生活場面における他者との関わりにおいて、以前よりも自信を持って臨めるようになってきた。しかし、実践開始前から見られていた友人とのトラブルは実践期間中も見られたため、今後も生徒の実態に応じて問答ゲームやソーシャルスキルトレーニングを継続して実践する必要性を感じた。

表6 生徒及び学級担任からの聞き取り内容

		内容
生徒A (中3男)	本人	ソーシャルスキルトレーニングを行ったことで、級友と話す機会が増えた。
	担任	級友に対しての声掛けや態度に優しさが見られるようになってきた。
生徒B (中2男)	本人	問答ゲームを通して、以前より対話する時間が長くなった。
	担任	自分の意見だけでなく、相手の考えも聞く姿勢が見られるようになってきた。
生徒C (中1男)	本人	問答ゲームをしたことで、自分の考えをまとめてから伝えやすくなった。
	担任	粗暴な話し方が、対話の型を促すことで丁寧に話せるようになってきた。
生徒D (中1男)	本人	初めてのことは緊張するが、SSTでやったことは自信を持って取り組めた。
	担任	問答ゲームを行ったことで、自分の考えを相手に伝えられるようになった。

3 研究のまとめと今後の課題

(1) 研究のまとめ

問答ゲームを繰り返し実践したことで、これまで話し掛けられても返事をしなかったり、何も言わずに首をかしげたりしていた生徒が、質問に対して自分の意見を述べるようになるなど、生徒の聞く力や話す力、考える力などの言語技術が高まった。また、言語技術が高まったことで、ソーシャルスキルトレーニングでは、活動の目的や、設定された場面を意識して考え、相手を思いやった言動をとるようになってきた。更に、ソーシャルスキルトレーニングの場面だけでなく、日常生活の中でも態度や言葉遣いに変化が見られるようになってきた。これらのことから、言語技術を高めることは、日頃の他者とのやり取りにおいてコミュニケーション能力を高めることに一定の効果があったと考えられる。

(2) 今後の課題

問答ゲームやソーシャルスキルトレーニングを通して、生徒は、質問されたことに対して聞いたり話したりする力が高まった一方で、自分から質問をしたり、他者と積極的に関わろうとしたりする力は、十分高まったとは言えない。また、他者と関わろうという気持ちは芽生えていても、どのような言動をすればよいか自信が持てず、行動に移せない生徒もいた。今後は、生徒が、問答ゲームやソーシャルスキルトレーニングで身に付けた力を日常生活で発揮できるように、取り組んでいきたい。

主な参考文献

- 三森ゆりか『ビジネスパーソンのための「言語技術」超入門 プレゼン・レポート・交渉の必勝法』中央公論新社2021
- 文部科学省『特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 自立活動編』2017
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会『児童生徒の学習評価の在り方について(報告)』2019
- 調査研究協力者会議初等中等教育部会コミュニケーション教育推進会議「配付資料3」2011
- 調査研究協力者会議言語力育成協力者会議「第1回配布資料」2006
- 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会「言語能力の向上に関する特別チーム配付資料」2016